

平成 26 年 1 月 9 日

南 の 風 5 3

南部ミニバスケットボール連盟

会 長 藤原 敬一

今年のウインターカップも熱戦続きでした。番狂わせもたくさんありました。

男子の決勝は、宮城の明成VS福岡の福大大濠でした。インターハイの覇者京北は、準決勝で姿を消しました。

決勝を簡単に振り返って見ます。両チーム、マンツーマンでスタートする。明成は14番のセンターにボールを集め、着実に得点を重ねる。大濠は14、13番を中心に攻め、交代した8番の3Pで流れを引きよせる。2ピリに入っても大濠は、明成の14番を抑えることができない。その後、明成が連続3Pを決めると大濠はタイムアウト。ここで明成がディフェンスを2-3のゾーンに変えた。このゾーンを大濠は攻めあぐむ。結果的に、このゾーンが勝敗を分けた。3ピリ、4ピリに入り一進一退のゲーム展開となるが、結局明成が92対78で勝利した。2ピリの明成のベンチワークが功を奏した。

次に女子の決勝を振り返ります。

連覇を狙う桜花と接戦を勝ち抜いた岐阜女子の対戦となった。立ち上がり両チームマンツーマンでスタート、開始早々、桜花5番のゴール下、7番のジャンプシュートが決まる。一方岐阜女子は、4番のランニングシュートや7番のゴール下が応戦する。しかし、その後得点が伸びない。桜花は全員得点をし、徐々にゲームの主導権を握る。2ピリに入り、岐阜女子はプレス気味の激しいディフェンスから、5番のジャンプシュートや4番の3Pで詰め寄る。しかし、ターンオーバーからリズムを失い、桜花に連続得点を許す。その後、岐阜女子はディフェンスを1-3-1のゾーンにし、流れを変えようと試みるが、桜花は7番の冷静なジャンプシュートなどで流れを渡さない。4ピリに入り、岐阜女子は激しいディフェンスから打開をはかるが、思うようにいかず結局、79対69で桜花が連覇を果たした。

敗れはしましたが、岐阜女子の決勝までの健闘は、観戦する人たちに大きな感動を与えました。優勝候補の一角、安城学園を準々決勝で67対64で下し、次の準決勝では、これも優勝候補の昭和学院を76対64で退けました。

岐阜女子の戦いぶりを検証します。オフェンスは、7番(184cm)のポストプレーと4番、5番のドライブインと3Pが中心です。4、5は160cm台の選手です。7番の選手は、去年から注目されていましたが、メンタル面の不安定さがありました。また、身体接触を気にするあまり、ボールに集中できないことが目につきました。しかし、今年はしっかりポストで仕事をしていました。面取りやボールに対するターゲットが特に良かったです。4、5番は同じようなタイプの選手ですが、非常にフィジカルが強く、素早いドライブインからのシュートは安定感抜群でした。さらに、外でノーマークになると、迷わず3Pを打ってきます。常に自分で攻めることを忘れない姿勢は、ミニバスのプレイヤーにも大変参考になりました。またこの2人は、ディフェンスにも大変アグレッシブであり、ハーフマンツーマンから激しく当たり、相手が隙を見せると、果敢にスチールに行き、ランニングシュートに持ち込んでいました。積極性の大切さを、改めて教えてくれたプレイヤーでした。

今年もウインターカップは、我々にたくさんのお土産をプレゼントしてくれました。